

街づくりプラン・コミュニティデザイン を企画しよう

～ともに生きる社会へ～

麻布中学校

実施学年：中学1年
生徒数：314人(7学級)

実施教科：生活科学(家庭科)
実施時間数：8時間



生活の中のユニバーサルデザイン



多様性体験



共生社会ポスター作り

・授業にあたっては一部富田道子先生(広島都市学園大学)の「ユニバーサルデザイン教育の手引き」を援用した。

学習のねらい

- 1) ユニバーサルデザインの事例(モノ・システム)や多様性体験をとおして、誰もが社会に参加しやすいデザインとはどういうものかを考える。
- 2) ノーマライゼーションの理解を深め、生徒が主体的に共生社会の実現に向けた街づくりプラン・コミュニティデザインを提案する。

学習活動

- 1) 身近なユニバーサルデザイン製品(現物)を用いて、ユニバーサルデザインとは何かを知る。
- 2) ユニバーサルデザインの事例写真(住まい・駅・交通機関・学校・スーパーマーケット等)を用いて誰もが社会に参加しやすいデザインとはどういうものかを考える。
- 3) 多様性体験(高齢者疑似体験、妊婦体験、チャイルドビジョン体験等)をとおして、ダイバーシティについて理解する。
- 4) 視覚障がい者、聴覚障がい者の方々のお話を伺い、誰もが暮らしやすい社会にするにはどのような視点が大切か考える。
- 5) 誰もが暮らしやすい社会・共生社会の実現に向けて、ノーマライゼーションの概念やそれに関わる世界や日本の法律を学ぶ。
- 6) 街づくりプラン・コミュニティデザインの個人レポートを作成する。
- 7) 個人レポートをもとに、グループで共生社会ポスターを作成する。
- 8) 共生社会ポスターのプレゼンテーション(まとめ)

準備品

- 1) UDグッズ…お菓子のパッケージ、洗剤容器と詰め替えパッケージ、調味料の旧容器と新容器、3色ボールペン、計量カップ、宅配便不在票 等
- 2) UD事例紹介写真
- 3) 多様性体験…妊婦ジャケット、「1Q84」黒白反転版、手首用おもり、軍手、色弱メガネ、クリアファイル、美術の教科書、色刷りちらし、幼児視界体験メガネ(チャイルドビジョン)
- 4) ポスターづくり…ライティングシート、ホワイトボードマーカー

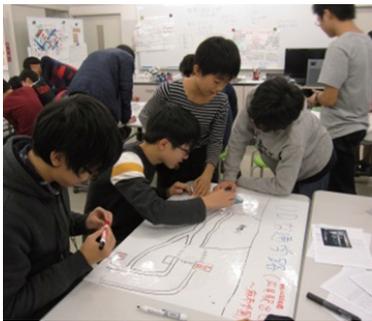
実施場所

家庭科室、普通教室

学習の流れ

| 場所・授業数 | 概要 | 活動の様子 | 反応 |
|-------------------------|---|--|---|
| <p>家庭科室</p> <p>1 時間</p> | <p>●生活の中のユニバーサルデザイン</p> <p>10 グループに分かれてモノにどのような配慮がされているか検討し、発表する。</p> <p>ex 不在連絡票、ジャムのびん、お菓子のパッケージ 2 種、画鋏 2 種、定規、レトルト食品のパッケージ 2 種比較（麻婆豆腐の素）、ふりかけのジッパー、洗剤容器（新・旧）</p> |  | <ul style="list-style-type: none"> 身近な製品の例を知ると、UD は多様な人々に使いやすいことを実感した。 身近に使っている様々なモノにいろいろな配慮があるとわかり、モノに対する見方が変わった。 |
| <p>家庭科室</p> <p>2 時間</p> | <p>●ユニバーサルデザインの紹介（写真を用いて）</p> <p>住宅設備、モビリティ、情報、自動販売機、スーパーマーケット、パブリックトイレ、校内の設備</p> <p>●企業のユニバーサルデザインの取り組み（凸版印刷）</p> |  | <ul style="list-style-type: none"> 日常的に見る何気ない掲示板の色や車の機能がユニバーサルデザインだと分かって意外だった。 幅広い人の意見を取り入れてよりよい製品が生み出されることを知った。 |
| <p>家庭科室</p> <p>3 時間</p> | <p>●多様性体験</p> <ul style="list-style-type: none"> 高齢者疑似体験（握力の低下、高齢者の見え方） 妊婦体験 チャイルドビジョン体験 色弱の人の見え方体験 普通版と反転版の読み比べ |  | <ul style="list-style-type: none"> 妊婦や高齢者、幼児はいろいろなハンディがあるのだと分かった。今まで以上に配慮が必要だと思った。 たくさんの人の気持ちや困っていることを知ることが出来たので、周りの人が助けたり、工夫したり出来ることはないかを考えてみようと思った。 |
| <p>家庭科室</p> <p>4 時間</p> | <p>●視覚・聴覚障がいのゲストティーチャーを迎えて</p> <ul style="list-style-type: none"> 誰もが暮らしやすい社会への視点を考える。 個人レポートの公共空間・住空間のデザイン企画に繋がることを期待して設定する。 |  | <ul style="list-style-type: none"> バリアを作っているのは障がいを持っている方ではなく、自分たちの環境、風潮であると感じた。 障がいのある方も含めて皆が参画していく必要があると感じた。 直接、視覚障がい者や聴覚障がい者の方の話聞いたのは初めてだったが、どちらの方々も非常に苦勞をしていることがわかった。 |

学習の流れ

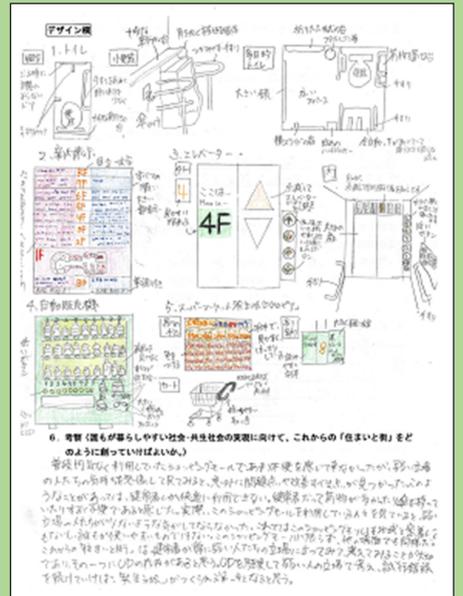
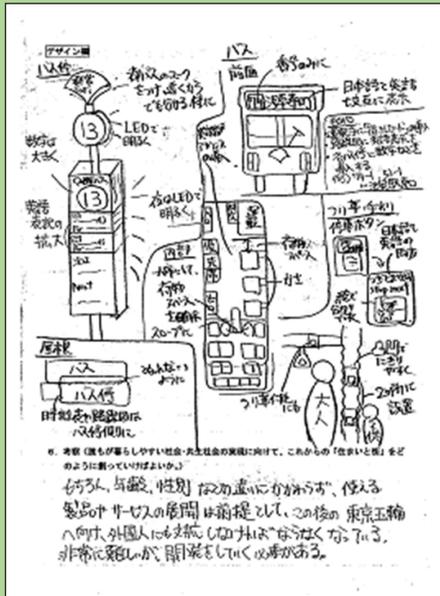
| 場所・授業数 | 概要 | 活動の様子 | 反応 |
|------------------|--|--|---|
| 教室 5 時間 | <ul style="list-style-type: none"> ●だれもが暮らしやすい社会の実現に向けて—気づきを社会へ ・日本の現状と様々な人がいる事への認識 ●人と社会のあり方を考える ・4つのバリアから人と社会のあり方を考える。 | | <ul style="list-style-type: none"> ・日本の少子高齢化が進んでいる社会に驚いた。社会全体として生きていくために、様々な人々のニーズを考えてみんながモノづくりをしていくことが大切だと気づいた。 |
| 教室 6 時間 | <ul style="list-style-type: none"> ●共生社会の実現に向けて—ノーマライゼーション ・ノーマライゼーションの理念、人権思想、歴史的流れについて理解する。 | | <ul style="list-style-type: none"> ・ノーマライゼーションを実現するための法律が外国よりも日本が数十年遅れていることに驚いた。 |
| 課題 | <p>個人レポート「街づくりプラン・コミュニティデザイン企画」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な人が暮らしやすい・利用しやすい住まいと街をデザインする。 <p>対象…駅、電車、横断歩道、交差点、公園、ショッピングモール、駅ビル等</p> | | |
| 家庭科室 7 時間 | <ul style="list-style-type: none"> ●共生社会ポスターづくり ・個人の調査レポートをもとに発見を共有し、グループでよりよい改善点を提案し合い、誰もが暮らしやすい理想の共生社会をデザインする。 |  | <ul style="list-style-type: none"> ・個人レポートを持ち寄りながら、楽しく意欲的にポスター作りを行った。 |
| 家庭科室 8 時間 | <ul style="list-style-type: none"> ●共生社会ポスターのプレゼンテーション |  | <ul style="list-style-type: none"> ・他のグループの発表を聞くことによって、自分たちとは違う新たな視点を発見した。 |

生徒の作品

■個人レポート

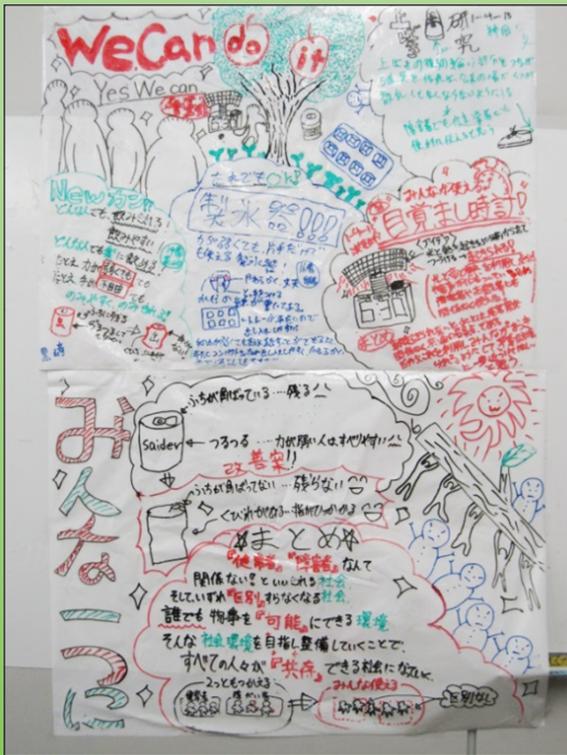


<我が地元の JR 駅のデザイン>



<地域に親しまれる
スーパーマーケットのデザイン>

■グループによる共生社会ポスター



<We can do it. みんな一つ>



<某駅(中規模)での1日>

先生の声

実施に当たり工夫した点 苦労した点

- ・理論と体験とをバランスよく組み合わせ、全体を通して生徒が能動的に取り組めるように授業カリキュラムを構成した。
- ・生徒が積極的に関わり、自分のこととして考えられるように、生徒の身近なユニバーサルデザイングッズを集めるよう工夫した。
- ・実際のモノに触れたり体験する機会を多くもち、生徒自らが様々な問題に気づくように配慮した。
- ・「気づき」を意識化させるために、授業の最後に必ずふり返りのコメントを書かせた。
- ・ゲストティーチャーとの日程調整（7クラス 3 日間）、手話通訳者（聴覚障がいの方には必ず手話通訳者をつけなければならない）の手当に苦労した。
- ・ゲストティーチャーの講義が共生社会実現に向けての気づきにつながった。全員の個人レポートに生かされたわけではなかったため、その気づきをデザイン化することを今後の課題にしたい。

課題を与える際に行った発問 及び工夫した点

- ・「障がい者に限定せず、インクルーシブ（※1）なおもてなしを考えよう」と発問した。この結果外国の人の視点も入った。
- ・デザインの視点としてアフォーダンス（※2）の視点を入れた。つまり、無意識に予測ができるデザインやその性質をうまく利用したデザインは使いやすいデザインであるので、そういう視点で周りの環境を見ってみよう指示を出した。
- ・観察は身近なところから行わせ、様々な行動や心理を思い浮かべながらウォッチングをさせた。
- ・個人レポート課題を出す時期を工夫し4回の授業後とした。
- ・優秀なレポートは関係先に送ることにした。

※1 インクルーシブ教育 障害のある子どもを含むすべての子どもに対して、子ども一人一人の教育的ニーズにあった適切な教育的支援を、「通常の学級において」行う教育のこと。

※2 アフォーダンス 物体の持つ属性（形、色、材質、etc.）が、物体自身をどう取り扱ったら良いかについてのメッセージをユーザに対して発している、とする考え。

児童・生徒の反応

- ・体験をすることによって初めて、いろいろな人の立場に立つことができ、多様性の理解につながった。
- ・ゲストティーチャーの話を聞くことによって、積極的に声をあげたり行動することが社会を変えていく力になることに気づいた。

教師の変化 (担当、担当外を含めて)

- ・ゲストティーチャーをお呼びしたことは生徒だけではなく、教員にも学ぶことが多かった。
- ・身近な題材を取り入れたり、実際に体験すること（生の声を聞く、モノをさわる等）と理論・知識を組み合わせることがより生徒の学びを深めることを再認識した。